
年上の彼女と年下の彼

富樫 聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年上の彼女と年下の彼

【NZコード】

N1023M

【作者名】

富樫 聖

【あらすじ】

毎子の親友の美鈴はショタコン。その美鈴の目下の想い人は六歳年下の小学生、高広だ。毎子は彼に会いたい美鈴に強制的に付き合わされる日々を送っている。

ところが何をトチ狂ったのか、毎子はその高広から告白されてしまつて？

つて、あたしはショタじゃないんだけどっ！？（血の涙）

美鈴と高広に振り回される毎子の話。

あたしの友人、川崎美鈴はショタコンである。

ショタコンというのは、つまり、少年愛好者のことで、自分の子供でもないのに、そこらを走り回っている小学生位の男の子に愛着もつてしまっている人のことを言う。

「だつて、だつて、可愛いじゃない。純真で打算もないし、真っ直ぐで元気だし。……やっぱ男の子はあの頃が一番輝いているわあ。それを見ても何も感じないなんて、絶対変。同年代の男よりずっと素敵なんだから。それに……半ズボンから出ている足が、どことなく色っぽくて……大人だとあの未発達故の色香はだせないわよ。……」
「うつとりとして言う美鈴の方がよっぽど少女。……外見はともかく。

あたしはあきらめの胸中で、陶酔している美鈴を尻目に、ため息をついた。

ああ、何が楽しくて、高一の女の子が弁当食べながら、ランデセル・半ズボン少年の話をしなくしゃならないの？

普通は、もっと別の話になるもんじゃない？ 一応青春期なんだしじ。

なのにそれが、口を開けば反抗期も終わりきらない、小学生の話ばっかり。

「ねえ、毎子お。今日は高広くん達、公園で遊んでいるかな？」
高広、といふ名にどきりとする。

「最近の子供って塾ばかり行つてて、放課後集まつて遊ぶことが少ないんだもの。……つまらないわ」

ふくり。大人っぽい顔をふくらませて、ブツクサつぶやく。

そう、美鈴はどう見ても大学生、もくしは〇しにしか見えないくらいに老けた顔をしているのだ。

本人けつこうそれを気にしてたりして、ショタに走るのはその口

ンプレックスの反動に違いないと、あたしは思つている。

「……きっと塾行つてて、誰もいんじやない？」

例の高広はどうだか知らないけど……。

奴は塾なんぞには通つていなければ。

「うう、ひどい。意地悪だわ。毎子だつて彼らに会つての楽しみにしているくせに……あたし、知つてはいるんだからね」

「じょ、冗談じやないわっ。誰がガキ共に会つてのを楽しみにしているもんですかっ！ あたし、年下趣味じやないわ」

「だつて、いつも楽しそうに子供たちにまじつて、遊んでいるじゃないの……」

恨みがましい田で、美鈴つてばあたしを見る。

あたしはまよつとして勢いよく首を振つた。本当に、冗談じやない。

「あたしは美鈴と違つて、ショタじやないの。いやいや遊んでるのよみ」

「あらう。あたしだつてショタじやないわよ？」

「……小学生に色香を感じるなんて、ショタ以外の何者でもないわよ。……ま、それはともかく、公園に行くなら一人で行つて。あたし、あのくそガキに会いたくないの」

「え？ やだつ、ついてきてよ。友達じやない。一人で行つてもつまらないし、それに 变に思われちゃうじやない！」

美鈴ががつしと箸を持つているあたしの手を握りしめる。

その反動で、箸にむしてあつた卵焼が弁当箱へ逆戻りしてしまつた。

「もう、充分変に思われているわよ」

再び卵焼に挑戦しながら、あたしは高広の顔を、ぼんやり思い出していた。

市原高広。

あたしの母校である近所の小学校の五年生。いわゆる後輩つてや

つ。

放課後、学校のすぐ前の大好きなグラウンドのある公園で玉遊びに興じているグループの中心的存在。

子供らしいハスキーな声に、ぱちりとした大きな目。思わず触れたくなるような、やわらかそうな髪の毛。ぐるぐるとよく動く、でも賢そうな表情。

本当に将来が楽しみで、かわいくて、美鈴がショタに走るものつなづけてしまつてくらいの、いわゆる美少年、なんだわ。

そう、外見は。

あたしも騙されたクチよ。黙つてれば弟に欲しいと、ショタでないあたしが思うくらいだもん。

けれど、顔がいいくらいじゃ、生意気盛りの小学生のリーダーにはなれないのよね。しみじみ思い知った。

まず、高広は、恐ろしく口が悪い。彼の辞書には敬語という字が存在していないのではないかに悪い。

おまけに超生意氣。あたしと美鈴なんか、未だかつて年上扱いされたことがないくらいだ。

更に、じつちが恥ずかしくなる程、ませている。

子供って、大体この年齢はませているものだけど、それに輪をかけて早熟なのだ。

ほんつと、会つた瞬間に挨拶代わりに殴つてやりたくなる程の子供なの。高広って。

それが日下美鈴の一番愛しい人だつて言つんだから、ショタの趣味つてわからないわあ。

そりやあ、長い目で見れば、いい男になる可能性も無きにしも非ず、だけど。

けれど、以上の理由だけであたしは高広に会いたくないと思つているわけではないのだ。

腕力で勝とうと思えば、勝てるもの。六歳の年齢差は伊達じやがない。

じゃあ、なぜ会つのを躊躇ちうちょしてこのかといつと聞いてびっくり、見てびっくりだよ。

未だにあたしは信じられないくらいだわ……。

ああ。悩んでしまつとうよつ、あたしまほつまつ言つて、悲しい……。

だつて。
だつて。

その高広に。小学五年生に。隣の皆みなの話を、それてしまつたんだもの。

「何だ。また来たのかよ?」

結局押し切られて、無理やり公園に連れてこられたあたしと美鈴と見るなり、高広はそう言つた。

「悪かったわね。来たくて来たわけじゃ……」

「高広くん、今日は野球なのね」

あたしの言葉を遮つた美鈴の台詞に、グラウンドを見渡すと、グローブを手にした子供がキャッチボールしたり、バットを振り回しているのが目に入った。

高広も、左手にグローブをつけている。

「あんた、どこのポジション?」

ふと聞いてみる。すると高広はふふんっと不敵に笑つて、

「オレが、ピッチャー以外の場所につくわけないだろ? 打順はもち四番だぜつ」

……高広は、自信家で傲慢ごまかでもあつた。

あんた、その歳で俺様つてどうよ?

「すごいつ。さつすが高広くん」

惚れた弱みなのか、盲目なのか、美鈴はやたら高広を褒める。

これが高広を増長させている原因だと想つた、あたしは。

「そうだ、毎子。メンバー足りないんだ。入るか？ 小学生の球を打つ自信がなけりや、やらなくてもいいけどさ」

思わずムカツ。呼びつけも気にくわないが、人を馬鹿にした態度も気にくわないつ。

「美鈴つ！ やるわよつ」

ぐつと拳を握りしめて言つたあたしに、美鈴はあつさり答えた。

「あたし、やめとく」

「あら、どうして？ 具合でも悪いの？」

「うん……つづん。そ、そういうわけではていけど、だ」

「あ、オレわかっただ。あれだろ？ 女の子の田つてやつ……」

妙に嬉しそうに高広はとんでもないことを口にする。

あたしはとつて、二十センチは低い高広の頭を「ゴイング」と殴つた。

「痛つてー！ 何すんだよつ。このババア」

……ほんつと、かわいい子供だことつ。そのババアに愛の告白なんてことしたくせに。「お黙り、この恥知らず。ひとつと守備位置につきなさいつ！」

痛い痛いとわめく高広を、グランジの方へと突き飛ばすと、あたしは真つ赤に頬を染めている美鈴に向き直つた。

「本当にどうしたの？」

いつもは、スポーツが苦手なわりには高広と一緒にいたいが為に、参加するのに。

美鈴は頬を染めたまま、ぼそぼそと口の中で何かをつぶやく。聞こえはしなかったものの、何を言いたいのか、わかつた。

つまりは、高広のバカタレが言つたよつて、女の子の田だつたつてわけね。

美鈴はハーツとため息をついた。

「あーあ。毎子がうらやましいわ。高広くんとだつて氣をくじお話できて……。あたし、何話していいのか、わからないもの……」

「うらやましくなんて、ないないつ」

「おーい。毎子お。早く打席に入れよ。何悠長に話してんだよー」「グラウンドの中央から、高広の声がかかる。すっかり用意は整つていいよううだ。

「今行くつ

年上の意地を見せてやる。鼻息も荒く歩き出したあたしに、美鈴が声をかけた。

「毎子。手加減してあげてね。高広くんを傷つけちゃいやだからね

「……」

……わざとぶつけたやる。あたしはそそつ決心した。

結局、勝負は引き分け。

あれほど望んだにもかかわらず、高広に球をぶつけられないうちに、夕日が沈んでしまったのだ。

薄暗くなつたグラウンドで美鈴と別れると、あたしはそそくと歩きだした。

悲しいことにあたしと高広は同じ町内に住んでいるのだ。
みんながいるならともかく、一人きりになるのはまずい。とてもまずい。

そう思つていたのに、しかし、高広はあつせり追つてきてしまつた。

「どうして、そつと帰ろうとすんだよ」

先にグローブをさしてあるバットを担いで高広はあたしの隣に並んだ。

「あたしは一人で帰りたいの。あんたは友達と帰ればいいでしょ」「こっちの道行くの、オレ一人だもん。……あ、毎子、オレを避けてるな？ そつだろ？ この間言つたこと、気にしてるんだ」

にせにや。意地の悪い笑いをする。

図星だったものだから、あたしはかあつと赤くなつてしまつた。
も、もしかして、この間の告白は、あたしをからかうためだつた

んじゃ
？

小学生が高校生に惚れたと考えるよりは、そつちの可能性の方が高い。とすると、悩んだ（悲しんだ）あたしが馬鹿みたいじゃないか。

そんなあたしの考えが分かつたのだろうか。高広は急に真面目な顔になつて、

「言つておくれけど、オレ本氣だよ。悪ふざけで言つたんじゃないからね」

「……冗談……」

ぴくぴく。顔が引きつってしまひ。

何と言つていゝのか、判らなくて、途方に暮れてしまひわ。

「冗談じゃないつて。オレの言ひこと信じひ。男が一世一代の大告白したんだからよ」

「な、何が一世一代だ。人を待ち伏せしたあげく『オレの女になれだなんて。あんた、あたしを馬鹿にしてるわね?』

そう。この間、家の前で突然立ちはだかった高広は、しばしあたしを上から下までじっと見つめ、それからおもむろに言つたのだ。
「決めた。毎子、オレの女になれよ」と。
絶句していると、「何だか知らないけど、好きになつちまつたんだよなあ。あ、返事はちゃんとくれよな。できれば、いい返事」などと勝手に言いまくり、あたしの頭を真っ白にしたのだ。

「馬鹿になんてしてないつ」

高広はむきになつて言つた。

「オレ、正直に言つただけだ。年齢だつて気にしない」

「あたしは気にするのよつ。すつゝくつ！」

「愛があれば歳の差なんて関係ないつて、テレビのドラマで言つてたぞ」

「愛なんてないわよつ」

あたしはなんだか泣きたくなつてしまつた。

何が乐しくて、こんな道の真ん中で小学生に口説かれなくちゃならないんだ。

「心配すんなよ。オレが愛してゐからや」

自信満々に、高広は告げる。

全く、こんな言葉をどこから覚えるのだらう。小学生の言ひやつ

フじやない。

「オレ、将来すつゞーかつによくなるんだぞ。今だつてかつこそこ

けどぞ。そのオレをふつたら、毎子絶対こーかいすんだ」

「……後悔つて、漢字で書ける?」

ぱつり、言つと、高広はぐつと言葉につまる。

やつぱり小学生。ませていても語彙力ないや。

もつとも頭のいい子なら答えられただらうけど、高広は、じつ見

たつて頭いいとは思えないしなあ。

「五年後に出来しらうしゃい。その時、あんたの言ひよつにかつ

こいい男になつてたら、つきあつたげる」

高広のやわらかい頬を、両手でむにゅとつねる。

背だつて、あたしより低い。何より六歳も年下じゃないか。考えるだけで無駄無駄。

あつさり決断を下すと、あたしは両手で頬をおおへている高広を残して、さつさと歩き出した。

「何だよ、五年後につきあうと決まつてんなら、今からだつていいじゃないか。けちつ。けちな女は嫌われるぞ。そんな物好きは、オレくらいいなもんだからなつ」

背後でそんなことを高広は、わめいたのだった。

名前のために言つたが、あたしはショタではない。そんな趣味は、全然全くない。

あたしの理想は、背が高くて優しくて、贅沢言つなら年上の人、

なのだ。

六歳も年下は問題外。だから、悩む必要なんてない。

ないのに、どうしてだか、気になってしまつのだ。高広のこと、そして美鈴のこと。

実はいうか、当然というか、あたしは美鈴に高広のこと話していない。

だつて、一応高広は美鈴の好きな人なのだ。その高広に告白されたなんて、言えないわ。

それにあたしだつてプライドがある。

生まれて始めてモテた相手が、小学生だなんて、笑い話にしかならない。それじゃあ、あまりにあたしが哀れだし、なんといつても虚しいすぎるわ。

だから誰にも、特に美鈴に知られる前にカタをつけてしまいたい。馬鹿な感情は捨てて、前のよつにケンカ友達（？）に戻ろう。そう思つているのに。いるのに。

ところがあいつ、あきらめなかつたのだ。

あたしと一人きりになると 避けているのに、どうしてだかついてくる しつこいくらいに、口説こうとするのだ。

それでも一人きりの時、つていうあたり、けつこう氣をつかつているのかもしねないが。

「毎子つてば、本当に冷たいよな。普通これだけ言えば、情にまだされて折れてくれるもんなのに……」

夏の暑い日に照らされて、すっかり焼けてしまつた頬をぐいっと手で拭いながら高広はぼやく。

汚れをとるつもりだつたようだけど、手の方が汚れていたため更に汚くなってしまった。

夕日のせいで、赤いのが黒いんだか、全く区別つかない。

とぼとぼと歩きながら、あたしは仕方なしにハンカチを高広に差し出した。

「へへつ。サンキュー」

うれしそうに高広は笑つて、赤色の とは言つても本当は白いのだが、夕日のせいで赤く見えてしまつ ハンカチで、遠慮なく顔を拭つた。

「だったら、情にほだされてくれる女の子を口説けばいいじゃない。それだけ熱意があれば、中にはおちてくれる女もいるかも……。そういう相手はいないの？」同世代に

だいたい、情にほだされるなんて、意味判つてて言つてこいるのだろうか？

「ダメダメ。あいつら、オレたちを馬鹿にしきつてるもん。もつと年上の、頼れる男がいいんだってよ」

「女の子の方が、男の子より早熟だものね。同じ歳より、年上に憧れるものよ……」

何気なく言つて、ふとひつかかりを覚える。

別にそれは女の子に限つたことじゃない。男の子だって、思春期は憧れるものだ。そう、年上の女性。

「わかった。それだ。そうに決まつてゐ」

「……何が？」

怪訝そうに眉をひそめる高広に、あたしがあれこれ説明してやると、

「じああ、オレが毎子を好きなのは、その年上に対する憧れだつていうのか？」

うなずくあたしを、高広は馬鹿にしきつたよつて笑つた。

「自分とこのものを、よく考えたこと、ある？ その考えでいくなら、毎子より美鈴の方を好きになるよ。オレは

などと、聞き捨てならないことを言つ。

「……あたしが、年上らしくないと嘆つのね？」

ひくひく。抑えてるのに頬が引きつてしまつ。

「だってさ、外見は高校生だけど、小学生相手に遊びで本気になるだろ？ それ見ると、どうしても年上に思えなくてさ」

ぎりぎり。歯ぎしりしてしまつ。

「あれ？ もしかして、怒った？」

「そこまで言われて、楽しくなる奴はないわよ……」

「こんなとんでもないガキに好かれてしまったあたしつて、もしかして不幸なのかもしれない。そう思う。しみじみと。

高広は、外見だけはいいその顔を綻ばせ、あたしを見上げて言った。

「『めん。でも、本当だからさ。オレが毎子を好きなのは……。憧れなんかじゃ、絶対ないよ。誓うよ。だから、少しさは眞面目に考えてくれよな。毎子』

にこいつと笑つたその顔は、やけに大人びていで、あたしは怒りも忘れてどきつとしてしまった。

そして、まずいことに、その後すぐてへへつと照れてしまつた高広を、かわいいとも思つてしまつたのだ。

車だけが多いくて人通りの少ない公園前の通りを、二人並んで歩きながら、あたしは、そんな自分の心に心底驚いていた。

前編（後書き）

『天下』をテーマにして書いた短編。
俺様小学生を書くのは楽しかったので、話がサクサク進みました。

これは、もしかして、すり「じくまざ」のではないだらうか？

あたしは帰りのしたくをしながら、ほんやり思つた。

情にほだされるということはないけど、よもや、高広をかわいいと思つてしまふなんて。六歳も年下なのに。

……いや、年下だから思つんだけどさ。

「美鈴……もし、もしもよ？ 高広に歯の出血をされたら……どうする？」

後ろの席で、同じく支度をしていた美鈴は、その言葉に我を忘れた。

「氣を失っちゃうくらいに嬉しいわ！」

あまりに大きな声で言つものだから、隣の席の男子が怪訝そうにあたしたちを見た。

「ば、ばかばか、声がでかいっ！」

「うひ。『ごめん。……だつて、毎子つてば、突然どつして？』

じきり。あたしは内心あせりつゝも、冷静を保つ。

「いや、別に。……そ、それじゃ、高広に彼女が出来たらどうする？」

「い、いるの！？ そういう子が！」

「も、もしかしたら、だつて？」

あまりの形相に、あたしはビクビクしてしまつた。

うひうひ。

これは絶対に、高広との事言えないわ。言つたら殺されちゃうー。

「……だけど、あと一年少しもすれば高広くんも小学校卒業しちゃうのよね。あたしの好きな高広くんじゃなくなっちゃうんだわ。好きな子も、彼女もきっと出来るだるうし」

ほう。悩ましげにため息などつく。

大人っぽくて、美人の美鈴が、実は小学生に恋焦がれているだな

「あたしさあ。思うんだけど、美鈴はもつと年相応の人に目をむけ
るんて、誰も思うまい。

「あたしさあ。思うんだけど、美鈴はもつと年相応の人に目をむけ
た方がいいと思うの」

「……年くつた人なんて、かわいくないわっ」

美鈴は顔をしかめる。

かわいいか、かわいくないかで決めるなんて、絶対歪んどる。
あたしは美鈴を正常の道へ戻すべく、頭を働かせつつ言った。
「けれど……その人たちだつて……ほら、昔はかわいい男の子だつ
たのよ。そう考えればいいのよ。高広だつて、時がたてば大人にな
つていちゃうんだし……」

「それはそつだけど……。ああ、どうして神様は永遠に子供のまま
でいさせてくれないのかしらねえ？……いえ。わかっているの。
そうよ。みんな大人になるのよ、いつか。好きな子もできるでしょ
う……」

結局美鈴は、高広個人というより、子供が好きみたいだ。
今現在、美鈴にとつては、高広という小学生は、彼女の好きな『
お子様』の象徴。

もちろん、高広の人格とか性格とかも認めてはいるけれど、それ
は決して「永遠」というわけにはいかない。

そんな部分を、美鈴は愛している。

今しか高広がもつていないもの。彼が永遠に持ちつづけてはいら
れないもの

「好きな人も、もしかしているかも。やただなあ。誰のものにもな
つて欲しくないのに」

「……自分がそういううとは、思わないの？」

なんだか、しつくりいかない。

美鈴は間違つていない。それは、判る。そういう愛し方つてある
もの。

そもそも、美鈴は高広に本当の意味での恋をしているわけではな
いんだ。

彼が、少年であるから。子供だから……。

でも、高広は成長していく。少しずつ、少しずつ。
大人になっていく彼を、美鈴はどう受け止めるのだろうか？

でもあたしは、違う。

美鈴とは、まったく違った意味で、高広が「子供」であることをこだわっている。

美鈴は、高広の子供の部分が好き。でも、あたしはあいつが子供であることが、嫌。

美鈴は、高広がずっと子供でいることを願っている。あたしは彼が早く大きくなることを、多少、願っている。

まるで両極端。

どっちがいいんだら？ どっちが駄目なのかしら？

美鈴は、高広が成長していくことを、認めるべきなのかしら？
あたしは、あいつが子供であることを、認めるべきなのかしら？

美鈴は、高広があたしを好きだってこと知つたら、どうするかしら？

「あたしが高広くんと……？」

きょとんと美鈴は目を丸くする。

「思わないなあ。……わからないかな。自分のものにもしたくない
かわりに、誰のものにもなって欲しくないのよ」

……すいません。ちっともわかりません。

結局あたしは美鈴の恋敵つてことになるのかなあ？

何か納得できないんだけどさ。何もかもが。

「それって、つまり、アイドルとか、タレントとかに対するファン
心理つてやつ？」

「そうそう。そんな感じ」

美鈴は満足そうに微笑んだ。

「だから、あたしは高広くんに恋しているんだけど、世間一般の恋

じゃないの。高広くんは、かわいくて好き。性格も容姿もお気に入り。だけど……こんなオバさんの毒牙にかけちゃいけないの」

「毒牙」。

「やつぱり、ショタだつてこと、認めてるのね?」

「まあ、失礼ね、毎子。あたしはショタじゃないわつ。ただ、男の子が好きなだけよ! 一生懸命な男の子、がね」

「一生懸命つて……高広のこと?」

首を傾げてしまう。

けれど、あたしを口説くことに関しては、確かに一生懸命だわね、あいつは。

あたしはいつもそり肩をすくめた。

「そろそろ返事くれても、いいんじゃない?」

いつものように口と別れて帰途についたとたん、高広は言った。「あんた……そのセリフはあたしが断るとは全然思っていないんだね?」

「あつたり前だ」

自信満々の顔で答える。

「こんないい男フル奴はいないさ」

あたしは口をあんぐり開けてしまった。

あ、呆れてものが言えないわ!

これが小学生の言つ台詞?

将来が不安だわ、今からこんな事言つてちゃ。

あたしは沈みつつある夕日を、途方にくれた目をして眺めた。ほんとうに途方に暮れていたのよ。だって、何て返事をしたらいいのか、わからなかつたんだもの。

そんな黄昏ているあたしの様子を見て高広は、見事な曲解したらしい。

「美鈴のこと気にしてんのか?」

高広は、美鈴が自分の事を好きだつて「じ」と、ちやんと知つている。

苦笑しかけたあたしは、はつとした。

美鈴？ そうだ、これだわ！

「そうよ……。あなたは親友の大切な人。そのあん、じゃなくて、あなたを美鈴から奪うなんてこと、出来ないわ。……だから、あたし、諦めるわ。高広のこと。涙を飲んで……」

あたしはよよと泣く真似をした。

ちょ、ちょっとやりすぎたかしら？ 声も平坦になつてしまつたし、お居がかつてたし……。

「 わざとらしく 」

案の定、こんな演技には騙されなかつた高広は、顔をしかめてつぶやいた。

やつぱ、この手も駄目か。

「確かに美鈴はオレのファンだけビ、普通女は友情より、恋をとるんじやないの？」

「馬鹿。あんたつて、本当、子供ねえ」

「な、何だよ、それはっ！」

と言い合いになりかけたその時。

バタンッと何か物が落ちる音が近くでした。

「ど、どりごうこと、なの？」

「Jの声。

ま、まさか 。

おぞるおぞる振り向いたあたしの目に、鞄を取り落としたまま立ちすくむ美鈴の姿が写つた。

顔から血の気がさーっと引いていく。

「み、美鈴……」「、これは、その……」

ど、どうして美鈴がこんなとこにいるんだね。まったくの正反対の方向だつたはずなのに。

てんてんてん。

通りの端の方にボールがバウンドしていく。それは、ついさっきまであたしたちがグラウンドで使っていた野球のボールだった。高広が忘れてきたボール。それをとどけるために、わざわざ反対の方向にきたんだ。

そう考えた瞬間、あたしの心は罪悪感で一杯になつた。

「き、聞いたやつた、のか？」

うろたえたような声で、高広が尋ねる。

何を、とも言つていないので、美鈴は「こくんと頷いた。

「全部。そういう、こと、だつたのね？だから毎子はあたしにあんなこと聞いたんだ」

口調は静かだつた。そこまでは。

「だつたら。だつたら、言つてくれればよかつたのにっ！ あたしがつ、反対したり、「こねたり、嫌だと言つと思ってたの？ 言わないわ、そんな事つ。どうして……どうして、隠したりしたのよっ」

美鈴の両方の目に涙が溢れた。

美鈴は怒つていた。高広があたしを好きになつたことではなくて、あたしがその事を彼女に隠していたことを。美鈴を、信用していないかつたことを。

どうしよう？ どうしよう？

あたしは恐慌状態になりながら、でも何も言えなかつた。

「……」

美鈴は何もいわず、鞄も拾わずに身を翻した。

今来た方向 公園へ向かつて走り去る。

あたしは声もなくその後ろ姿を見送つた。どうしよう？

どうすれば、良かつたんだろう？

高広が美鈴の残していった鞄を拾い上げた。

多分、友情より恋をとるなんて軽々しく言つたことを、後悔して

いるのだろう。神妙な表情だつた。

「……行けよ。追つていきなよ」

ぱつり、つぶやく。

え？と顔を上げたあたしに、高広は鞄を差し出しながら、「オレの片思いなだけだ。そう言いなよ。……それが事実だもん、くやしいけど。追つていって、『ごめんって伝えてよ』

「高広、あんたつて……。いい男、ね

美鈴の鞄を受け取ると、あたしは高広の体をぎゅっと抱きしめる。なんて言うか『負けた』って、正直思ったのだ。

「何だ、今頃わかったのかよ？」

おとなしく抱きしめられながら、照れくさそうな声で、高広は言った。

「けど、言つておくけど、諦めたわけじゃないぞ。オレが好きなのは、毎子だからな。大きな声でそう言えるように、美鈴の許可を貰つてこい。喧嘩になつたら、味方してやるから。すぐ行くから」「

あたしは走つた。

さつきまでいたグランドにを出て、その奥の公園内に入る。ジャングルジム、砂場を抜け、出口付近のブランコに差しかかつた時、三人の大学生らしい男に囲まれている女の子の姿がちらりと目に映つた。

ぎょっとして足を止める。それは美鈴だった。

「お茶しようよ。こんな所で泣いてたら変に思われるって」

「そうやう。冷たいものでも飲んで、落ち着きなよ」

などといふ会話が聞こえるから、ナンパされているのだ。

「オレたちじや、嫌？」

それまで、一言も声を発しなかつた美鈴は顔を上げ、三人をかわるがわる見た。

やばいかもしない。あたしはどうさに間にに入った。

「ちょっと待ちなさいよ」

「毎子？ 追いかけてきたの？」

涙に濡れた顔であたしを見る。

嫌がるかな、と思つたけれど、美鈴は変わらず悲しげではあったけれど、小さく笑つた。

「……鞄。持つててくれたのね。ありがとう、ごめんね」

「ううん……あたしの方こそ、『ごめんなさい。高広もね、ごめん、

つて言つてた。追つ掛けていけつて言つたのも、あの子なの」

一呼吸おいてから、あたしは付け足した。

「……けつこうの男の子してるわ。柄にもなく、かつこいいなんて思つちゃつた」

「やあね。高広くんはもとからかつこいいのよ？ あたしの田ん、狂いはないんだから」

ふたりして、そつと微笑み合つ。

「彼氏と三角関係なのか。そんな奴ふつちまえよ」

「そうだ。そうだ。」

周りの男たちはあたし達の台詞を聞いて、何だかピントの外れたことを言つた。

あたしは内心苦笑。

確かに、今の会話聞いていたなら、かつ思えるだろう。三角関係には違いないし。

「そつちの彼女も行いつよ。お茶しこそ。お兄さんたちがおいつてやるから」

「い、いえ、結構ですっ」

あたしはあわてて言つ。

けれど、美鈴はどうしたことか、行く気になつていつらしこ。

「この人たちだって、昔は可愛い男の子だったのよ。そう思えば…

…」

「い、いらっしゃり」

それはあたしが前に言つた言葉だ。

た、確かにそう言つたけど、時と場所と場合と、そして人も選んで欲しいわつ。

「あ、あたしたち、彼が待つてますんでっ」

あたしは美鈴の手を無理やりひつぱつた。

「あ。○○が二海あ。別に何も」は二つともいい。

「中華書局影印」

卷之二

げつと思いつつ振りかえると、そこにはバットを担いだ、半袖半ズボンの少年が立っていた。

高広 いつの間に。

「おー、こーさんたち。オレの女に手を出せないでよ。」「ちよ、ちよつといつ誰があんたの女になつたつてのー。」
「云つて云つて」とかいて、全く、何て事をつ。

「高広くん、素敵つ」

と美鈴。今の今までの様子はどこへ行つてしまつたのやら、だ。
三人の大学生たちは、高広を見、美鈴を見、そして最後にあたしの方を向き、何か頬を引きつらせながら尋ねてきた。
「も、もしかして、こいつが君たちの三角関係の男？ 君、アレの女なの？」

「ウル」

あたしは答えに詰まつた。

この人たちについていくのも嫌だけど、そんな事否定するのも、プライドゆるさないつ。

否定の言葉を口にしかけた時、それよりも早くに、誰かが横から口をはさんだ。

「うう。あの子、この子の彼氏なの？」

み、
美鈴！

何て事をおおお。

三人は同時に吹き出した。爆笑といつてもいいくらい。
さつき頬を引きつらせていていたのは、どうやら笑いを抑えていたか

ららじい。

「い、いや、悪かった」

げらげら笑いながら、中のうちの一人が言つた。目には涙が溜まつてゐる。

「彼氏がいるなんて、思わなかつたんだ……くづくづく……そ、そんなに笑うことないでしょ！」

「か、彼氏に免じて、今日は退散するわ。オレ、くづくづく
「おい、ボーズ。彼女大切にすんだぜ。じゃあな。ふふ」
げらげらと笑いながら、大学生たちは歩き出した。

あつさり引き下がつてくれたのはいいけど、な、なんか複雑。やつぱり小学生を彼に持つなんて、笑いの種にしかならないもんなんだ。

彼ら、あたしの視界から消える時まで、腹を抱えつつ、笑つていた。

「高広くん。高広くん。かつこよかつたわよお

「ふふん。あつたり前っ」

二人は一人で、さつきのこととは忘れたようにきやうきやう笑いながら言い合つてゐる。

……ああ。めまい。

「しかたないわ。高広くんのことは諦めて、毎子に譲るわ。ああ、あたしつて健氣……」

数日後。

美鈴は言つた。あたしの意思は無視して。

「ちょ、ちょっと、美鈴？ あたしはまだ高広と付き合つなんて言つてない……」

「高広くんをふるつていつの？」

目を半開きにして、あたしをにらみつける。

あたしはあわてて首を振つた。弱みがあるから、あたしは美鈴に

強く出れない。

だけど、高広と付き合ひのせ、ちよつとお……ねえ。

大体、デートしても、小学生相手じゃ奢つても「いつ」とも出来ないんじゃない?

良くて割り勘。悪くて、あたしの奢り。

ちょっと「冗談じゃないわ。世間体つていうのも、あるしー。

だいたい「デートに誘つてもくれないんじやない?

相変わらず、楽しそうに球遊びに興じて居し……。

「幸せにな。毎子」

につこり。美鈴は笑つた。

美鈴の方が、幸せそうだ。

「よつ。高橋、年下の彼は元気か?」

「ショタの鑑! 年上の彼女!」

「ひゅうひゅう」

あたしとすれ違いざまにクラスメイトの男の子たちが口々にはやし立てる。

周りの女子はくすくす忍び笑い。

あたしはぎりぎりと歯ぎしりした。

ここ数日の間に、あたしが小学生を彼氏にして居るといつ噂が、クラス中に知れ渡つていた。

犯人はもちろん、あたしの田の前でにつこり笑つている女。でも、文句も言えない。

……ああ。どうしてあたしがこんな田にあわなくちゃならないの?
しくしくしく。

幸せそうな、みんなの中で。
あたしだけが、不幸 だった。

あつと毎子と高広はなし崩し的に付き合つていになつて、そしてそのままズルズルと付き合い続けることになるのでしょうか。一応、高広は美青年に成長していく（でも俺様）といつ設定なので、長い目で見れば毎子はいい買い物をしたといつ」と（笑）

*
シヨタのタグをつけておきながら、愛くるしい少年が出てくる話ではありません……。

期待されていた方はゴメンなさいです。でも個人的に気に入っている作品です。読んでくださいありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023m/>

年上の彼女と年下の彼

2010年10月8日12時23分発行